

愛国心の強い大統領が  
転生先のジャパリパーク  
で旅をする

あるありある

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ジョニー・ジョースターに倒されたファニー・ヴァレンタイン。

なぜそうなったのかは不明だが——彼は全く未知の場所へ転生した。

そこは、別次元に移動できる彼でさえ初めて来た場所——ジャパリパークと呼ばれる場所だった。

ヴァレンタインをカバンちゃんのポジションに置き換えただけなので、ストーリーはアニメ一期と全く同じです。

# 目次

大統領のご来園

1



# 大統領のご来園

視界が暗転し、周りの音は瞬時に聞こえなくなる。

死という体験の最中、ヴァレンタインの心に後悔の文字なんて全く無かった。

（『後悔』も『未練』も無い……。私は愛する国の為に尽くしたまでだ……。

ジョニイ・ジョースターは……。既に『ディエゴ・ブランドー』の手を打つてある。別

次元の彼のスタンド能力は全く別の物であるはずだ）

（我が行動と心に一点の曇り無し……。全てが『正義』だ——）

次の瞬間、彼は違和感を感じた。既に死体となった筈の彼の耳に——音が飛び込んで来たのだ。

（——！?!……………これは……………『音』か？なぜ音が聞こえる？私は既に死んでいる筈だッ……）

一瞬戸惑ったが、彼は直ぐに音の正体を掴んだ。今まで何回も感じて来た、己の心臓の鼓動音。

その次に彼が聞こえた音は、風で揺れる草木の音——彼は一つの結論に辿り着くいた。

（生きている——という事か？私は何？…信じられない事ではあるが………！）

「……………はッ!!」

開かれた彼の視界にまず見えた景色——それは、晴天の空模様だった。立派な青空だ。

空気も澄んでいて、呼吸する度にその良質さを感じさせられる。

「……………」

未だ戸惑いは隠せないが、今の自分が仰向けで倒れていたことはわかった。

咄嗟に上体を起こし、周りを見渡す。

「何処なのだこの『世界』は……………?」

彼の目に映る世界は、全く知らない土地——しかしどこか、アフリカのサバンナと似たような雰囲気を感じる。

その場から立ち上がり、更によく、周りを見渡す。

『D4C』のスタンド能力を身につけて以降、様々な『次元』を行き来したが……この

私も初めて見る世界だ……。」

何故死んだはずの自分が生きている？という疑問に対する答えは依然として見つかっていないが、それは少し置いておく事にしよう。とりあえず今は、自分がこうして生きているという『奇跡』——ヴァレンタインはそれに感謝する事にした。

当初は困惑していたが、少しずつ落ち着き、冷静さを取り戻して来た。

「——ふむ。……この世界の正体についてはゆくゆく追い求めるとして、だ。今この私  
が知りたい事柄は、『この世界ではD4Cが使えるのか？』……という一点のみだ。」

「使える」という可能性に賭けたヴァレンタインは、自身の精神の片割れ——彼の名を  
口にする。

「——『Dirty deeds done dirt cheap』——<sup>デー</sup>ツ！」

ヴァレンタインの願いに応えるように、彼は出現した。

ピンと直立するウサ耳の様な物が生えた顔立ちに、球体状の肩。ヴァレンタインのスタ  
ンド、「Dirty deeds done dirt cheap」——略称「D4  
C」——である。

「——うむ……。『D4C』は使える、と。」

ヴァレンタインは少し安堵した。非常事態に遭遇したとしても、対処する事が可能に  
なったからだ。

「ともかく、これで危機は対処できるな……。この世界に『スタンド使い』や、私の敵となる人物が居るかはわからないが、護身はできる。……行動するでしょう。なるべく日没までに、人間の住む街や村を見つければいいところだ。」

ヴァレンタインは足を動かし、歩き始める。

——その時の事だった。

バオオオ——ッ

ヴァレンタインの視界の端で、何かが動いた。というより、高く跳躍したのだ。

ヴァレンタインはその「何か」の動きを感じた方向へ顔を向ける。

高く跳躍したそれは、タツ……と、ヴァレンタインから十メートル以上離れた地面に着

地し——

「わああ——イツー！」

「はッ!!」

その生物は歓喜の感情を感じるような叫びをあげながら、ヴァレンタインに一直線に向かってくる。

——その最中、ヴァレンタインは集中していた。集中して、自分に向かってくるその生き物に対して「観て」いたのだ。

(……人間……か？ 顔や身体を観るに女……だが、さっきの跳躍力に滞空時間……とても



じゃあないが、人間技とは思えない……だがッ!

明らかに『こいつは私を狙っている』——それは間違いない、と見ていいだろうッ)

『D4C』 イイツ!」

ヴァレンタインに飛びかかる彼女の顔の目の前で、D4Cは大振りな拳を振るう。

「みッ!」

寸前で彼女の顔には当たらなかつたものの、かなりの風圧を顔面に受けた彼女の顔は歪む。

この隙に——と、ヴァレンタインは彼女の傍に移動し、軌道から逸れる。

やつと視界が開けたと思つた彼女が見た光景は——目の前に迫る地面。

(あれっ? いなっ……)

「ぶギヤアアッ!」

思考の余裕もままならぬまま、彼女の顔は地面に激突する。

「う、ミヤ、アア、アアアアア~~~~~ッ!」

顔を上げた際の彼女の顔は、血で真っ赤に塗れている。思いつきり鼻をぶつけた為、鼻血が止まらなくなっている。

——そんな涙を流し、激痛に襲われ、叫び声を上げている真っ只中の彼女を、ヴァレンタインは静かに見下ろしている。

(こいつのこの様子じゃあ、落ち着いて話ができるまでに時間がかかるな……落ち着きを取り戻したらすぐにでもこの場所の事を聞くとしよう。それが終わったらもう用はないがな……)

都合の良い展開で顔面の傷が回復し、落ち着きを取り戻した彼女に、ヴァレンタインは質問をした。

質問の答えによると、彼女の名前はサーバルと言い、この辺りは彼女の縄張りなのだそうです。

「——ごッ……ごめんね？わたしっ、『狩りごっこ』が大好きで……」

「君は相手の合否を聞きもしないでムリヤリ遊びに誘うのか？サーバル。」

「(ゴ)めん……」

まさに「青菜に塩」という言葉通り、彼女はシユンとする。

だがわざわざ私が気を使って優しく接する義理はない。こちらの質問には答えて貰

おう。

「サーバル。この『世界』は一体どこなんだ？」

「できれば私が倒れていた理由も知りたいのだが。」

「んう？ここはジャパリパークだよ！あなたがなんで居たのかはちよつとわかんないや……ごめんね？」

「——……『ジャパリパーク』……？」

「ねえねえ！あなたは何の『フレンズ』なの？」

すっかり元の元気を取り戻したサーバルは、ヴァレンタインにそう質問した。

To be continued…。